

新しい「地域生活者」像の発見

上久保達夫著 『農山村地域生活者の思想―事例による実証的研究―』

星 宮 智 光

本書は、著者が平成一五年一月に京都大学から農学博士の学位を授与された論文「現代農山村における『地域生活者』像に関する研究―岐阜県における山村住民を事例として―」を基にして、これに若干の補足と修正を加えたものである。本書の内容紹介と書評に入るまえに、これの全体の構成を理解するため、次に目次を挙げておく。

はじめに

第一章 「地域生活者」構想のきっかけ

第二章 理論化の過程と方法的検討

第三章 「地域生活者」概念の検討

第四章 山村生活者の実態の紹介と分析・考察

第五章 山村地域生活者の思想

付 章 林業労働への新規参入者（追跡調査結果より）

あとがき

参考文献

索引

「はじめに」において、本書の課題と構成が明らかにされる。まず、「経済至上主義」や「生産技術の偏重」に傾いていた従

来の農林業研究、農村研究、あるいは農林行政において、農林業を担う主体の研究と同時に、日々の生活文化の担い手である人間の研究もまた重要であると指摘する。本書では、地域社会でもとりわけ山村地域とその住民を取り上げて、林業とかかわり深い「地域生活者」の生活論理と人間像を説明しようとしている。ここでいう「地域生活者」とは、著者によれば「さまざまな問題を抱え、悲喜こもごもの日常を送りつつ、しかも生きがいをもってそこに暮し、地域社会を構成する地域住民」を指すのである。そして、本書の課題は山村生活者の実態分析を通してえた具体的な生活内容の検討から、そこに共通する「地域生活者」像を確定することにある。

そして、この研究の出発点となった著者の問題意識は、都市から山村地域を新たな生活の場とすべく転入してくる新規参入者たちの目的や生活内容の調査・検討をするうちに、山村で生きがいをもって暮すとはどういうことかを改めて考えさせられたことに発したのであるという。

第一章では、「地域生活者」構想のきっかけがのべられる。林業労働への新規参入者T氏の場合は山の仕事やムラの生活には用意周到であったものの、結局、森林組合に勤めながら農業を営むことに限界を感じ、自営業として山仕事を請け負いつつ農業に取り組んでいるが、妻子と離れて山仕事と農業に従事し

ている生活の今後が心配される。このT氏は典型的なイターン新規参入者（田舎に生まれ育った者が、学業や就職で都会へ一旦出た後に再び帰郷するUターンに対して、都会で生まれ育った者が、田舎へ移住するのを文字どおりイターンという）である。こうしたイターン型の新規参入者は、概して自分の家地、山林、農地などを所有せず、土着の定住者でなく、しかも将来の生活設計も不可視の部分が多い。著者は客観的条件面で、本書で取り上げる「農山村地域生活者」の範疇に入れるには留保がいるとする。

しかし、こうした参入者の生活が提起している問題は、現代社会において山村地域社会に暮すことの意義を改めて考え直さなければならぬという重い課題を突きつけている。著者は、この問題こそが「農山村地域生活者」の事例的研究の出発点にあるという。

第二章では、「理論化の過程と方法的検討」について論じられる。著者のこれまでのフィールドワークの経験を自己批判的に振り返りながら、改めて「理論とは何か」「方法的とはどうあるべきか」について整理してみたものである。著者はまず、フィールドワークにおける観察や社会調査によるデータの集積や蓄積が帰納的に直接的に理論構築に結びつき、寄与するといふのは安易な考えであると指摘する。なぜなら、理論とは諸々

の観察や調査データから一方的帰納的に導き出されるものでもなければ、かといって机上の空論でもない。つまり、本来、理論とは論理演繹的に事前に構築されていなければならないものだからである。その反省の上に立って理論化のプロセスの整理に努めることが必要である。こうして、著者は理論化の際には、さしあたってT・S・クーンの「概念・法則・理論の体系を形成するパラダイム」の考えを基本にするのが有効であり、科学的プロセスその他の諸説をヒントにした理論化のプロセスの定式化もまた意味があると提唱する。ここで、著者が「理論」といつているのは、一般にいう「作業上の仮説」のことであろう。研究過程の前提、あるいは出発点となる仮説を、「理論」という次元で把え、自覚的にこれを検討した上で研究の前提、具体的プロセスに入るべきだということである。こうして、研究上の作業仮説への自覚的な自己批判と反省が必要であると強調する。ややもすれば無意識のうちに直観的に研究仮説を指定したり、研究過程の進行中にも仮説への厳しい反省を忘れがちな場合が多い。著者はこの仮説（理論）の構築自体をまず討究し、これが研究過程の前提として妥当であるのか、確認すべきであるというのである。

ついで、理論（仮説）を検証するための方法論上の検討が必要であるという。そして、従来、「科学性において劣る」とさ

れる生活史法などは、科学と非科学の境界に位置する領域として、社会学のみならずその他の隣接諸科学においても、これからのさらなる発展の可能性を秘めた方法論といえるのではないかと提案する。さらに、第四章の第二節「なぜ生活史なのか」では、この生活史研究には、一に家族社会学、二に歴史社会学あるいは社会史、三にはアメリカ・シカゴ学派の都市研究に由来する『ポーランド農民』以降の伝統的古典的社会学の一つの方法を総合したような立場からのアプローチが可能であり、有効であると提唱する。

この第二章では、本書の研究の基礎をなす著者独自の仮説論と方法論が提唱されており、第三章以下の論述の構成はこの提唱に即して展開されることになる。

第三章は、「地域生活者」の全体像を調査し、考察・描写しようとする本研究の仮説的前提として、まず「地域生活者」の概念の検討に入る。つまり、現代日本の農村地域における「地域生活者」の存在形態を実地での事例分析を通じて本格的に検出する作業（第四章）に先立って、ここではまず従来の理論学説を紹介・整備し、いわゆる「生活者」の理念型（マックス・ウェーバー）を定立しようとするのが主眼となる。

まず、日本の近現代における哲学者、社会学者、あるいは民俗学者たちの「生活者論」を取り上げ、その思想的、学説

的系譜を確認しながら、「地域生活者」の概念について検討を行なう。著者はまず、「生活」というものを「人間個人の生命活動であり、日々の暮しであり、一生を通じてなされる活動の総体であることは言うに及ばず、それに加えて、人間が生きがいをもってより良い人生を送ろうとして刻苦勉勵する各人のプロセスである。」と定義する。その上で、理念型としての「地域生活者」の特徴を五項目抽出し、「地域生活者」像を実証的に考察・記述するに先立つ仮説的概念とする。その五項目とは次のごとく要約される。

「地域生活者」は日々の生活面で精神的葛藤、動揺の紆余曲折を経験しながらも、一に生活の創造者、二に労働・休養・娯楽・教養を生活の基本的要素とする人間の活動総体の体现者、三に金銭至上主義に走らない、効率主義にもこだわらないエートスを有する者、四に経済的には決して豊かではないが、時間的なゆとりと気持ちの余裕がある人たち、五に特にみずからの社会的な名誉・名声・地位などには無関心な普通の人たちである。

第二章で著者が提案したいわゆる「理論」、すなわち論理演繹的に事前に構築されるべき仮説的概念は、本章においては理念型としての「地域生活者」の五つの特徴として示され、事例研究における方法的仮説として前提される。

新しい「地域生活者」像の発見 上久保達夫著『農山村地域生活者の思想―事例による実証的研究―』（星宮）

第四章では、岐阜県下の三地域十一事例の山村生活者を取り上げ、その実態を紹介し、分析と考察を加える。ここは、本書のなかで質量ともにもっともウエイトのおかれている部分で、著者の事例調査と考察の実質が展開されている。その方法は、著者が第二章で提唱した「生活史法」が用いられる。まず面接による聞き取り形式によって調査が実施される。各事例に共通の質問項目は「家族構成」、「生活歴（史）」、「山仕事（林業労働）」、「ムラの生活」、「環境認識」などについてであるが、事例四〜十一では後二者を一括して聞き取りされている。

本章第四節では、調査対象者在住町村の概要として、岐阜県恵那郡加子母村（当時、以下同様）、同上矢作町、同郡上郡八幡町の三地域の地理的特徴、歴史、人口、諸産業の動向、民俗、観光などにわたって概略が紹介される。第五節では、調査対象者一人ひとりについて生活実態の紹介が先述の五項目等にわたって記述され、これを基本資料として分析と考察が行なわれる。その過程において、著者は第三章で指摘した「理念型としての地域生活者の五つの特徴」に照合させながら、被調査者の「地域生活者」としての実像、全人間像を記述してゆく。

調査対象者たちは、四十代から八十代の男性で、林業従事者（林業の一人親方等）、ムラの基幹産業である林業と関連する木地職人、家具職人、それにトマト栽培の農業者などである。彼

らの山村生活の実態紹介は、村内での彼らの生活構造の解明を
目指して、聞き取り内容の事実在即した記述と、それに著者の
説明・解釈を加えたものである。分析と考察は彼らの生活理解
や人間理解に重点をおき、それに即して進められる。ここから、
仮説として前提されていた「地域生活者」の五つの特徴が再検
討され修正され、改めて「地域生活者」像が記述され、浮かび
上がることになる。

第五章では、第四章での調査、分析、考察の結果にもとづい
て、山村地域生活者の今日的な実像と思想とを明らかにする。
まず、「持続的農村の形成」に不可欠なものとして、著者は祖
田修（京都大学）の理論にならない、経済的・生活的・生態環境
的な三層の価値の総合的調和的実現ということを強調する。著
者はこの三層の価値構成の如何という側面から山村地域生活者
を比較考察する。そして、その三層の価値の具現者としての山
村地域生活者の存在形態を意識面・行動面・機能面から検討・
考察することによって、新たな「山村生活者」の実像（生活と
思想）を描き出す。これは、前述の仮説として措定されていた
五つの特徴への修正加筆であり、本書の総括となっている。著
者の本研究の総括としての新たな「山村生活者」像とは、次の
十一項目にまとめられる。

（意識面として）

一 自然性の強い地域社会の文化特性を身につけて継承しよ
うとする定住志向者

二 伝統的地域文化の継承、存続を重視する人

三 金銭至上主義、効率万能主義に走らない

四 モノ、カネよりもヒト、ココロを大切にし、気持ちに余
裕がある

（行動面として）

五 自然性の重視と自給的、自立的行動が見られる

六 生産と生活が同一地域内で一体化している

七 普通の人びと

八 生活の創造者

（機能面として）

九 基本的に家業の継承者であり、多かれ少なかれ家産の保
有者、継承者

十 村内での役割分担の責任を果たしている人

十一 外に開かれた社会のなかの開放的な人間、開かれた心
を持つ人間

こうして著者は、以上の十一項の諸特徴を備えながら、地域
社会のなかで「生きがいをもって生活している人」こそ、「地
域生活者」であるとす。このことは、現代日本の農山村地域
に遍く適用可能であろうと、著者は主張する。そして、今後の

山村ビジョン（山村の再生、活性化等）に果たす役割として、彼らが「普通の人」であるがゆえに、等身大のモデル的存在たりうるか否か、どちらとも決しがたいが、身近な「山村地域生活者」の姿から学び、乗りこえて行く対象として、彼らは存在意義を発揮するであろう、と結ぶのである。

付章は、第一章でも取り上げた林業労働への、いわゆるイターン新規参入者の場合の追跡調査の報告である。平成五年度に岐阜県下の七町村の山村に新規参入した九名の事例を取り上げ、追跡調査し、現在どこでどのように定住し、どのような生活を営んでいるか、その実態を紹介し、若干の分析と考察の結果を報告している。この報告自体がイターン新規参入者像を記述している点で、社会調査の成果としては十分に有意義である。同時に、本書における「山村地域生活者」像を「イターン参入者」像との比較のなかで、より具体的、特徴的に浮かび上がらせ、事例による実証研究である本書にさらに奥行きを深さを出している。したがって、この章は第一章と合わせてイターン参入者の「生活者」像を記述する章としてもと本章のなかに組み入れるべきものであったのではないかと考える。

以上、『農山村地域生活者の思想』について、内容の概要を紹介してきたが、終りに若干の私評を加えてみたい。

新しい「地域生活者」像の発見 上久保達夫著『農山村地域生活者の思想——事例による実証的研究——』（星宮）

まず、第二章で提唱する社会諸科学における「理論化プロセス」、すなわち仮説の構築作業検討の重要性を強調し、それに対応するかたちで第三章では「生活者論」の思想的、学説的系譜の追求を詳細に行なっている。ここでの追求は、その問題点において日本思想史研究の重要かつ新鮮な課題を含むだけに、さらに広く農民史、労働史等を取り込み、もっと広範囲に資料を求められればよいと思った。この思想史研究から抽出した仮説、理念型としての「地域生活者」の五つの特徴は、実態の分析と考察の過程できわめて重要な視点、解釈の立場となつて、著者の理論を左右しているからである。

第五章で挙げられた「地域生活者」の十一項の特徴的属性がきわめて適応型で、現状肯定的かつ楽天的であるのは、事例分析と考察の仮説的前提としての「地域生活者」の五つの特徴、延いては著者の思想的系譜の把握の仕方によ来すると思われる。著者は一往、「地域生活者」を生活面で精神的葛藤や動揺を経験していると指摘はしているものの、その苦悩や社会構造的矛盾等への考察の追求が稀薄であると思う。もちろん、過剰なまでに矛盾や限界等の指摘のみに考察や解釈の力点をおくのも妥当的であるとは思わないが。こうして、むしろ、著者の「地域生活者」へのまなざしと理解はあえてその生活のなかに幸福と肯定の意味を発掘し、積極面を強調してこれを評価して

いる点で、生活者自身の真実を深く把えていると思われる。この洞察と肯定的評価は、「地域生活者」のありかたに大きな意味を与え、希望と可能性とを付与するものである。

次に、第二章で提唱されている「生活史法」について、著者は概略的な説明だけで終っている。しかし、これは事例調査、分析、考察の基盤をなすものであるだけに、さらに詳細な方法論的な説明が必要であると思う。著者によれば、この「生活史法」は決して曖昧な方法ではなくて、むしろ生活理解の深く正しい方法として豊かな可能性を秘めていると説明されるが、著者独自の「生活史法」が本書では明確に詳細に説明されていない。もちろん、この方法は第四章の生活者の実態紹介、分析・考察の実際的応用の過程のなかに機能しているわけである。そしてその記述は大方妥当的で成功していると思われるが、方法についての明確な内容を十分に理解できないだけに、方法論的效果についてはいまは容易に評価しがたい。あえて私見をのべれば、著者が事例を重視し、それに即して分析・考察する方法は「生活現象学的方法」とよぶにふさわしいものように思う。

今日、日本の第一次産業、とりわけ農林業、延いては農山村の生活にたいしては消極的評価や行きづまり的な同情のみが横溢しすぎる。こうした状況のなかで、本書においては、農山村生活者の明るく肯定的な実像が発掘され、それが生きいきと浮

かび上げられている。この意義は大きい。著者の明るい視点が今日における、また将来における山村地域生活者の再認識の糸口、新しい規範となれば幸いである。その点で、本書は今日における新しい「地域生活者」像の発見の書と評したい。

(御茶の水書房、平成二六年三月一八日発行、二七五頁、本体価格四五〇〇円)

(ほしみや ちこう・叡山学院教授・本学文学部非常勤講師)